## 26. 多発性硬化症の高圧酸素療法

古野利夫[*1)]　龍村俊樹[*1)]　高久　晃[*1)]
佐々木博[*2)]
([*1)]富山医科薬科大学救急部
[*2)]　同　病院長)

**【目的】**多発性硬化症に対し高圧酸素療法を施行し，その臨床経過より，高圧酸素療法の臨床的意義を明らかにするために検討を行った。

**【対象】**対象症例は6例，男性2例，女性4例で，年齢は20～60歳で，14年の経過を持つ1例以外は5年以下の経過であった。

**【方法】**高圧酸素療法は2.5気圧下で100%酸素を40分間吸入させ，加圧，減圧にそれぞれ15分間を要した。1日1回で，発作の初期は7日間連続で行い，慢性期例に対しては，週1～3回の頻度で高圧酸素療法を実施した。臨床効果は，歩行障害などの運動機能や感覚機能検査による他覚所見及び，しびれや痛みなどの自覚的所見の改善程度により判定した。

**【結果】**14年の経過を持つ46歳の女性は，痙性麻痺による歩行障害で，ステロイド療法を続けながら入退院をくり返していたが，7回の高圧酸素療法にて歩行障害は著明に改善し，以後週2回の高圧酸素療法で，ステロイドを使用することなく，3年間入院がみられていない。5年の経過を持つ35歳の女性は，左半身優位の筋力低下と知覚鈍麻がみられ，ステロイド療法の効果は低かった。1回の高圧酸素療法で症状は著明に改善したが，その効果は2日間程で薄れるため，週3回の外来療法を行っている。球後視神経炎で発症した20歳の女性は，ステロイドの大量療法にて症状の回復はみられていたが，高圧酸素療法を併用することにより，回復までの期間を短縮することが可能となった。

**【結語】**多発性硬化症に対する高圧酸素療法の意義としては，(1)入院回数の減少，(2)ステロイドの減量，(3)発作時の神経症状の回復を早めることにあると思われた。

## 27. 顔面神経麻痺に対する高気圧酸素療法の効果

中島理証　石埼恵二　木谷泰治
藤田達士　渡辺久志
(群馬大学医学部麻酔蘇生学教室
同　附属病院高気圧酸素治療室)

顔面神経麻痺は日常臨床でしばしば遭遇する疾患であり，当院外来を受診する患者の上位を占めている。われわれは当科を受診した顔面神経麻痺患者に星状神経節ブロックを1日1回施行しているが，高気圧酸素療法（HBO）の治療効果を観察する目的で，ブロック後併用治療し，その効果を検討したので報告する。

**【対象】**対象は当院外来を受診した顔面神経麻痺患者30名。治療開始が発病以来14日以内のもの20例，14日以後のもの10例である。そのうち4名のHunt症候群を含む。

**【方法】**全例当院外来にて1日1回星状神経ブロック（0.25%マーカイン）を受けた後，2ATA・60分間のHBOを施行した。治療効果の判定は顔面神経麻痺程度の判定基準（麻痺スコア）で行い，35点以上に改善したものを治癒，それ以下のものを不完全治癒例とした。

**【結果】**治療開始14日以内の患者については，治癒例は20例中8例，14日以後に治療開始したものは10例中2例で，早期治療開始例の効果が認められた。Hunt症候群4例はいずれも不完全治癒例で，スコアは最低6～最高32点であった。治療中特に悪化したものや合併症は見られなかった。

**【考察】**諸家の報告では顔面神経麻痺のうちベル麻痺は50～70%であるが，われわれの症例では33%であり，かなり低くなっている。これは，当科受診する患者が他科を受診した重症例が多いものと思われる。今回HBOの有効性の検討の目的で併用療法を行ったが，HBOの著明な効果は認められなかった。又Hunt症候群の予後の悪いことを含めて，高血圧症や糖尿病との関連についても今後検討する必要があると思われた。